



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第15主日 B年 (2021年7月11日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：アモス書 7章12—15節

第二朗読：エフェソの信徒への手紙 1章3—14節

福音朗読：マルコによる福音 6章7—13節

テーマ：イエスさまの細やかさと厳しさ

三つの朗読から

第一朗読の「わたしを取り」(15節)は印象的です。アマツヤは預言者になりたくてなった人です。しかも、預言によって生活の糧を得ていたのでしょう。しかし、アモスは神さまからの選びによって預言者にさせられました。神の助け、神の招きの中で預言者として生きていくのです。

第二朗読の「キリストにおいてお選びになりました」(4節)も、選びに関する言葉です。しかも、「天地創造の前」から愛によって、愛を通して、神さまは選んでおられたのです。

福音朗読は、イエスさまがお選びになった十二人のお弟子さん、つまり使徒たちがイエスさまによって派遣されています。使徒という言葉は、ギリシア語では「遣わされた者」という意味です。十二人はイエスさまの指示と想いを胸に抱いて出かけていくのです。

説教

福音朗読に次のように書かれています。「イエスは十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた。その際、汚れた霊に対する権能を授け、……」(6章7節)。「呼び寄せ」、「遣わすことにされた」、「授け」という三つの動詞のギリシア語原文の時制は異なっています。「呼び寄せる」は現在形です。これは過去の出来事をまるで現在繰り返されている事実のように伝えるための現在形の用法です(歴史的現在)。「遣わすことにされた」はフランシスコ会訳を見ても「遣わすことを始められた」となっています。こちらのほうが原文の直訳に近いです。「始めた」はアオリスト形で記されています。アオリスト形にはいろいろな意味あいがありますが、ここでは「ある段階への到達とその段階の開始」を示します。ですので、十二人の使徒たちを派遣することでイエスさまの宣教活動が新しい段階に入ったことを表します。「授ける」は未完了過去という時制です。動作の継続、反復を表しますので、十二人にまとめて権能を授けたのではなく、二人ずつ組ごとに別々に権能を与えたと理解できます。

イエスさまは、十二人の使徒たちをまとめて送り出したではありません。十二人を遣わすのはイエスさまにとって神の国の宣教の新しい段階の開始を意味していました。大きなチャレンジです。そこで、イエスさまは二人ずつの組のそれぞれにあった、あるいは必要な力や能力をお与えになったのです。それほど、イエスさまは十二人の性格、能力、傾向を知っておられたのです。こんなところにイエスさまの優しさというか、気づかひが見えてきます。

さて、イエスさまは遣わすにあたって、指示を与えます。8－9節では宣教に向かう旅での態度です。杖は蛇や獣を避けるための道具になります。履物は荒れた野山を歩くには必要です。共観福音書では杖も履物も禁じられています(マタ10章10節、ルカ9章3節、10章4節参照)。『マルコによる福音書』の方が規則がゆるめられています。同じように9節では「下着は二枚着てはならない」(新共同訳)とありますが、『ルカによる福音書』では「下着も二枚持つてはならない」(9章3節)とあります。『マルコによる福音書』の方がゆるい規則です。しかし、8節で「パンも、袋も、また帯の中に金も持たず」とありますから、決してゆるやかな指示だとは言いきれないでしょう。袋は施し物、喜捨を受けた時に、それを取っておくためのものです。しかし、イエスさまのお考えは喜捨はその場で消費できる範囲に限るべきで、将来を考えるようになるほど、将来の備えのためになるほどもらってはならないということだと思います。「金」はフランススコ会訳では「小銭」となっています。原文の意味は銅貨です。ですから、金貨や銀貨はもちろんのこと、小銭である銅貨すらも持参してはならないという意味になります。

イエスさまの二つ目の指示は宣教の目的地での態度についてです(10－11節)。ある家に迎え入れられたら、そこに留まらなければいけません。よりよい待遇をしてくれる家があっても、家を変えてはならないのです。もし受け入れてくれる場所がなかったら、「足の裏の埃を払い落としなさい」(11節)とあります(フランススコ会訳は「足の裏の塵」)。足の裏の塵を払うとは、異邦の汚れを払うためでした。ユダヤ人たちは他国から自分の国に戻ってきた時には、足の塵を払ったそうです。ですから、使徒たちの言葉とわざを受け入れない場所は異邦のように見なされ、「まことのイスラエル」ではないとされたのです。

どうして、イエスさまはこんなに厳しい要求を出かけて行く十二人に与えたのでしょうか? 「旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず、ただ履物は履くように、そして『下着は二枚着てはならない』と命じられた」(8－9節)。それは、使徒たちが伝えるのは神の国の福音だからです。神の国の福音を伝える者が、別なものに頼ってはならないからです。ただ、神さまだけに頼り、神さまだけに信頼して生きていかなければ、福音は伝わらないのです。

また、「彼らへの証しとして足の裏の埃を払い落としなさい」という指示もまた、厳しいです。つまり、十二人を受け入れる人々は「まことのイスラエル」として、神さまとの関わりを生きる人々になりますが、受け入れない人々は、仮に自分たちこそは真のユダヤ人だと自負していたとしても、異邦人のように見なされるのです。なぜなら、十二人こそが「まことのイスラエル」、神さまとの豊かな交わりを生きる者だからです。